

与右衛門「はい。わかりました。」

与右衛門さんは、はつきりと大きな声で、返事をしました。

⑧ それから数日後の夜の事です。お奉行の屋敷に突然、火の矢（矢の先に火をつけたもの）が数本打ち込まれました。

奉行所役人「大変です。お奉行。お屋敷と奉行所に、火の矢が打ち込まれました。火はすぐに消しましたが、曲者（くせもの）は逃がしてしまいました。」

吉長「よし、わかった。みんなにも気をつけるように伝えよ。」



奉行所役人

「はい、わかりました。」

役人は、走って奉行所へ戻って行きました。

お奉行は、『きつと須卜の仲間の仕業だ』と、思いました。

火の矢は、幸い、すぐに消され、火事にはなりませんでしたが、

吉長「須卜の息子や仲間が、屋敷に火の矢を打ち込んできたのだ。このさわざの間に、わしや役人が、

屋敷の外へ出てきたら、切りかかって、須卜を取り返そうと思っただろう。今夜からは、奉行

所の全員が交代で、三度ずつ、屋敷と奉行所の見回りをして、警戒する。よいな！」

お奉行は、役人たちを集めると、このように命じて屋敷や奉行所を、しっかりと守ることにしました。

吉長「与右衛門、お前もみんなと一緒に交代で見回りをするのだ。よいか、相手は、いつ、どのようにおそってくるかわからぬ。気をぬかずに、しっかりと注意をして、見回るのだ。」

与右衛門「はい、気をつけて見回ります。」

与右衛門さんは、大きな声で答えました。

⑨ おじいさんは、与右衛門さんが、こわがらずにしっかりと答えたので頼もしく感じました。

吉長「与右衛門、おまえにこの刀を与える。賊がおそってきたら、これで戦うのだ。」

おじいさんはそう言って、与右衛門さんに長い刀を渡しました。

でも、与右衛門さんは、木刀で剣術の稽古はしていますが、まだ一度も刀で、人と戦ったことはありません。本物の長い刀を持つのも初めてです。

与右衛門「長い刀はこんなに重いのか。」

与右衛門さんは、初めて持つて、おどろきました。賊と戦うことは、

少しも怖いとは、思いませんでした。次の日も、その次の日も、火の矢が屋敷に飛んできましたが、みんなの守りで、

火はすぐ消し止められました。



「来られるものなら

来てみる、相手になつてやる。」

と、心でつぶやき、しっかりと、その役目を果たしていました。

吉長「そろそろ、大勢で奉行所をおそってくるかもしれない。みんなですっかりと守りを固めよ。」

お奉行は全員を集めて声をかけました。

そして、次の日の夜遅くお奉行が再びみんなを集めて、言いました。

吉長「どうやら今夜、賊がおそってくるようだ。今夜は門を開いておく。賊が入ってきたら捕まえるのだ。」

お奉行の言葉を聞いた、みんなは緊張しました。

⑩ 奉行所役人「いよいよ来るか。」

奉行所の役人たちは決められた場所で賊が来るのを待ち構えているとついにやってきました。須卜の息子

を大将に、その仲間たちが屋敷をおそってきたのです。役人のひとりりが小聲でみんなに声をかけました。

奉行所役人「来たぞ！。みんな気をつけて守れ。」

みんなが緊張の中で、大きくうなずき、目くばせしました。暗い中で、何人の賊がいるのかわかりません。いくつもの足音がします。

与右衛門さんは手に力をこめ、ぐつ！とこぶしを握りしめました。

『賊がかかってきたら切ることになる』

与右衛門さんは、刀に手をかけ、構えました。



その時、

お奉行や与右衛門さんの前に、賊が姿を現しました。与右衛門さんは『来た！』と思いました。

お奉行の吉長は、『ビュービュー』と、得意の槍を持って振り回しました。

吉長「お前たち、悪いことにこりず、いつまで、このようなことを続けるのだ。どうしても須卜を助けないなら、かかってこい。」

賊たちは、刀を抜いて、今にもと